

「ただいま」

暁は玄関のドアを開け、奥の部屋へ向かつて元気よく声をかけた。

「おかえり」

柔らかい返事がある。靴をそろえて脱ぎ、タタツと廊下を走って台所を覗き込むと、四人がけのテーブルの上にお皿が見えた。香ばしくて甘い匂いが鼻孔をくすぐる。振り返った叔母さんが「靴を置いて、手を洗つてきてからね」と微笑んだ。自分の部屋に靴を放り投げ、洗面所で手を洗う。言いつけを聞いて台所にゆくと「食べていいわよ」とお許しが出た。二つあるドーナツのうち一つを手に取り、がぶりと噛みつく。まだ温かいそれは、中がふんわりして美味しかった。

「そっだ暁、悟史を知らない?」

向かい側に腰掛けた叔母さんが、お茶を飲みながら聞いてくる。

「知らない」

帰り、同じクラスの子と前を歩いていただけ、途中でいなくなつた。そのまま公園に行つたか、友達の家遊びに行つたんじゃないだろうか。暁がおやつを食べ終わると、叔母さんは椅子から立ち上がり、かけていたエプロンを外した。

「ちよつとお夕飯の買い物に行つてくるわね」

「僕も一緒に行つていい?」

叔母さんは「いいわよ」と頷いた。二人で「一緒に近くのスーパーへ行く。買い物かごには、人参、玉葱と順々に入れられていく。今日はカレー?」

振り返った叔母さんは「大当たり」と目を細めて笑つた。精算の終わったカレーの材料を、ビニール袋二つに分けて、小さい方を暁は握りしめた。叔母さんは「二つとも私が持つわよ」と言つたけど、手伝いたかつた。

「あら、柏木さん。お買い物?」

スーパーを出たところで、眼鏡の女の人に声をかけられた。

「こんにちは、石黒さん」

叔母さんは立ち止まる。眼鏡の人は、晧をチラリと見下ろすと「息子さん？」と聞いてきた。

「いいえ、甥っ子さんです」

「そうなの？ 随分綺麗な子ねえ。男の子にしておくのがもったいないわ。何年生なの？」

「小学五年なんです」

「あら、ちっちゃいわね。二、三年生ぐらいかと思ってたわ」

叔母さんは五分ぐらい立ち話をしていた。別れ際、眼鏡の石黒さんは「本当、綺麗な子ね」と念を押すように繰り返した。「おばさんの話は退屈だったでしょ」

自分が浮かない顔をしていることに気づいたのか、そう言われた。首を横に振ったけど、甥っ子と言いださなくても、息子でいいのに……と思ったことは口にできなかつた。

風が吹くと、叔母さんの髪がふわつと後ろになびいた。まっすぐにサラサラしていて綺麗だ。晧は自分の、癖の強い髪を左手でぐしゃぐしゃ掻き回した。

「晧は友達の家遊びに行ったりしないの？」

小さなビニール袋を、強く握りしめる。

「友達、いない」

「あら、どうして？」

「髪で、嫌なことと言われる」

どんなに洗つても、乾いたら髪の毛がくるくるになる。これのせいで、クラスでは「鳥の巣」と言つて虐められる。叔母さんみたくにまっすぐな髪がよかつた。悟史も叔母さんと一緒に、髪が伸びても絶対に「鳥の巣」になつたりしない。

「どんな嫌なことを言われるの？ 晧の髪は綿毛みたいで可愛いのに」

叔母さんの白い手が、頭の上にとそつと置かれる。温かくて柔らかい指先に撫でられると、胸の中までふわふわして、飛び跳ねたくなる。

自分にはお父さんとお母さんがいない。だからお父さんの妹、叔母さん夫婦の家で暮らしている。二歳の時に一人が離婚して、お父さんの方に引き取られたけど、五歳の時に病気で死んだ。お母さんも離婚した後すぐ、事故で死んでる。お父さんのはあるけど、お母さんは写真も残ってない。

叔母さんには自分と同じ歳の一人息子、悟史がいる。我が儘の甘えん坊で、小さい頃は自分が叔母さんと話していると「ママを取るな」と泣いて怒り、お店に行くとき「あの玩具が欲しい」と言つては床に転がつてわめき散らした。叔母さんは困つた顔をしながら、悟史と自分に同じ玩具を買つてくれた。「僕はいらないよ」と言つても「いいよ」と優しく笑う。買つてもらつた玩具を悟史は三日で放り出し、自分はすくすくく大事にした。

悟史は今でも「ゲーム買つて」とか叔母さんにおねだりするけど、前ほどべつたり甘えなくなつた。学校が終わつたら家にも帰らず友達と遊びに行く。たぶん自分といたくないんだらうなと思う。一緒にいるのを叔父さんに見つかったら、絶対に勉強のことを言われるからだ。

小学三年ぐらいから、真面目に勉強をしない悟史はテストでもいい点が取れなくなつた。自分はいつも九十点以上で、叔母さんは「晧は偉いわねえ」と褒めてくれた後で「悟史も晧ぐらい頑張つてくれたらね」とため息をついた。

一度、同じテストを受けて自分が九十六点、悟史が六十点の時があつた。この時の悟史は頑張つていたのに、運悪く一枚のテストが叔父さんに見つかつてしまつた。普段の悟史の点数を知らなかつた叔父さんは「どうして晧よりもこんなに悪いんだ」と息子を怒鳴りつけた。

悟史は泣いて家を飛び出し、夜中になっても帰ってこなくて大騒ぎした。それから暁は自分のテストを叔母さんに見せるのをやめた。テストの点が悪いのは悟史が勉強しないせいだけだ、自分と比べられるのは可哀想だった。テストの点を見せなくなっても、叔母さんは何も言わなかった。「がんばってる?」の問いかけに「うん」と答えていればそれでよかった。「そういえば暁がうちに来てもう六年目かあ。早いねえ」

物心ついた頃から叔母さんの家で育って、この家の子みたいに思うけど違う。別にあつたんだと言われても、覚えてもいない自分の家族は、影絵を見ているように実感がなかった。叔母さんはよくお父さんの話をしてくれるけど、本当はちよつと嫌だ。それを聞かずに自分に自分はこの家の子供じゃないんだと気づかされる。

去年、悟史の書いた詩が都の小学生代表の五編に選ばれて、全国大会に出場したことがあった。それを知った時、叔父さんと叔母さんは大喜びした。前の年、自分の絵がこども都展で入賞した時とは比べようもなかった。叔父さんは知り合いに「こいつには意外な才能があつて……」と悟史を自慢し、叔母さんもそれを嬉しそうに隣で聞いてた。

これが本当の子とよその子の違いなのかとぼんやり感じていた。どれだけ勉強を頑張っても、叔母さんは悟史がテストでたまに良い点を取ってきた時のような、まるで宝物を見つけたみたいに分わりした顔では笑ってくれなかった。

「子供はすぐに大きくなるから。悟史なんて、この前まで『お母さん、お母さん』って甘えてきてたのになあ」
叔母さんの目が遠くを見ている。

「何だか向こうの山が霞んでる。黄砂かしらねえ」

すぐ脇の道を、バイクがプロロツと猛スピードで走り抜けていった。風を感じるぐらい近くて、叔母さんは慌てて暁の肩を強く引き寄せた。

「狭い道なのに、危ないなあ。ちゃんと前を見てるのかしら」

頬が触れた叔母さんのシャツからは、甘くてあつたかくて、いい匂いがする。

「若い子かしら、まったく」

それから家に帰るまで、手を繋いで歩いた。柔らかくて温かい叔母さんの手を暁はしっかりと握った。本物の子供になれなくても、自分は叔母さんちの子供。……ずつと家族だ。

繋がついていた手は、家の前で離れた。叔母さんは庭を見て「あらっ?」と小さく声をあげた。

「あの人、帰ってきてるのかしら?」
白い軽自動車は庭に止まっている。叔父さんは建築現場の下請けをしているので、夜は遅くまで帰ってこない。こんな時間に戻ってきているのは珍しかった。

「あなた、お帰りなさい」

叔母さんが声をかけても、叔父さんは居間の畳の上にあぐらをかき、新聞を睨みつけたまま返事をしない。すぐく機械嫌が悪そうでちよつと怖かった。叔母さんは「どうしたのかしら」とポソポソ呟きながら台所に入った。手伝うよ、と言ったけど「いいわよ。すぐにできるし」と追い出される。暁は静かに廊下を歩いて、自分の部屋に入った。

叔父さんはあまり喋らない。けど怒ると怖い。悟史がテストの点が悪かったり、我が儘を言うとか、空気がびりびり震えるような怒鳴り声をあげる。あの声を聞くと体が萎んで動かなくなる。……悟史がテストを隠したくなる気持ちもちよつとわかる。

夕食になっても、叔父さんの機嫌は悪いままたつた。悟史が叔母さんに「あのゲーム買ってよ。クラスのみんなは持っているんだよ」としつこくおねだりするのを聞いて「うるさい」と大声で怒鳴った。悟史は口をへの字にまげたまま残りのカレーを口の中に押し込むと、ちよつとささ言わずに台所を出ていった。